

ヨハネ福音書の第一過越物語 (2-4 章) の 集中構造的解釈

宮崎 譽

序文

この論文は、ヨハネによる福音書の第一過越物語 (2-4 章) を文学的な集中構造 (Chiasm, Chiasmus) の視点で解釈する試みである。この取り組みを通して、歴史的批評学によって断片化されて解釈されてきた 3 章 16-36 節のテキストの統合性を明らかにしたい。歴史的批評学では近似する二つの神学的ナレーション (3:16-21, 3:31-36) が分かれて配置されていることが問題視されてきたが、集中構造的視点により、その配置が文学的な技法であることを論じる。そのために、まず第一章として、課題とされる歴史的批評学によるテキストを断片化する解釈を紹介し、第二章に集中構造とその判断基準を論じ、第三章にヨハネ福音書の第一過越物語 (2 章-4 章) のマクロ集中構造を明らかにする。第四章では、第一過越物語の集中構造的解釈を持つ神学的・倫理学的意義を描写する。

I 歴史的批評学によるヨハネ福音書 3 章の諸解釈

第四福音書 3 章 16-21 節と 3 章 31-36 節の二つのナレーションは、歴史的批評学の研究の対象とされてきた。どちらも対話調の物語 (イエスとニコデモの対話、洗礼者ヨハネと彼の弟子の対話) から突如、まとまった神学的主張を持つナレーションに文体が変わる。さらに、この二つのナレーションが主張する神学は近似している。それ故に、歴史的批評学では、3 章 16-21 節と 3 章 31-36 節の二つのユニットが、編集によって不自然に分断されたといういくつかの仮

説が立てられてきた。

ルドルフ・ブルトマンの仮説によると、3章31-36節のナレーションは本来3章21節の後に置かれており、イエスの対話の結論という役割を持っていたとされる。間にあるユニット(3:22-30)は結論の付録として付加されたものと理解される¹。ルドルフ・シュナッケンブルグの仮説では、ニコデモとの対話は、イエスがニコデモの不信仰を非難する3章12節で終わり、洗礼者ヨハネの物語の記事(3:22-30)は、その直ぐ後に続いていたが、第四福音書の記者がイエスのメッセージの要約をケリグマ的対話として、正しい順序ではないところに挿入したと解釈した²。レイモンド・ブラウンの理解によると、3章31-36節の物語は元々3章11-21節とは独立したイエスの言葉の記録であり、それが誤って洗礼者ヨハネに帰せられたとする³。ユルゲン・ベッカーの視点では、3章1-21節をヨハネ学派における議論の結果の塊であり、3章31-36節はニコデモとの対話の補足的な注解とされる。3章31-36節は、写本の筆記者によって誤った場所に置かれてしまったという仮説が立てられた⁴。

このように、歴史的批評学では、近似する神学的主張を持つナレーションが、二つに分かれて配置されていることを聖書テキストの編集上の問題とし、その理由となる様々な仮説を立ててきた⁵。しかしながら、本論文ではこれらの文

¹ Rudolf Bultmann, *The Gospel of John: A Commentary*. (Philadelphia: Westminster, 1971), 131-132; David Rensberger, *Johannine Faith and Liberating Community* (Philadelphia, PA: The Westminster Press, 1988), 53.

² Rudolf Schnackenberg, *Gospel According to St. John*. (New York: Crossroad Publishing Co., 1982) 1:361-362; Rensberger, *Johannine*, 53.

³ Raymond Brown, *The Gospel according to John (i-xi) The Anchor Bible* (Garden City, NY: Doubleday & Company, Inc., 1966) xxxvii; 160; Rensberger, *Johannine*, 53.

⁴ Jürgen Becker, "J 3, 1-21 als Reflex Johanneischer Schuldiskussion," in *Das Wort und die Wörter* (ed. Horst Balz and Siegfried Schulz) 93-94; Rensberger, *Johannine*, 53.

⁵ 他方、これらのテキストを統合的に解釈する試みもある。C・K・バレットとエルンスト・ヘンヒェンは、現在の聖書テキストの形状の順序のままテキストを解釈している。C. K. Barrett, *Gospel According to St. John*, 2nd ed. (Philadelphia: Westminster Press, 1978), 219; and Ernst Haenchen, *John: A Commentary on the Gospel of John*. (Hermeneia) (Philadelphia: Fortress Press, 1984), 1:209-210;

章ユニットの位置を誤った配置として見るのではなく、マクロ集中構造として配置されており、むしろ、その配置が福音を効果的に証していることを明らかにする。

II 集中構造とその基準

1) 集中構造の定義

メアリー・シュルツとペリー・ヨルダーは「どのように (How) 言われているかとは、何が (What) 言われているかの一部である⁶。」と語り、聖書テキストの内容と共に、テキストの形状も解釈する上で意味をなすとみる。この主張は、並行法や集中構造に注目するときにも重要な視点を提供する。並行法は言葉や概念において応答するフレーズ、文節、物語ユニットの要素から成立する。並行するものは、意味論、文法、構文法など、様々なレベルで起こる⁷。一つの種類の並行法として集中構造がある。近代の集中構造研究の父と呼ばれるニルス・W・ルンドは、集中構造を以下のように定義している。「ギリシャ語の起源からすると、この [集中構造という] 用語は文学的形状や前提を意味する。それは「交差するように配置された」文章内の言葉である。この用語はレトリックの一部として、文章の中で繰り返される言葉や、続いて現れる言葉の順序の入れ替えを意味する用語として用いられる⁸。ギリシャ語の文字「X」が交差

Rensberger, *Johannine*, 54.

デイヴィッド・レンズバーガーも3章全体を統合的に見て、3章の描写はヨハネ共同体にニコデモグループと洗礼者ヨハネの弟子たちとの間に緊張関係があった証であると理解している。Rensberger, *Johannine*, 54-57.

C・H・ドットは3章をひとつの思想ユニットとして把握して、「キリスト者の水と霊による洗礼の用法」と「水のみを用いる洗礼者ヨハネ」の間にある神学的な対照を洞察し、主題の連続性を明らかにしている。C. H. Dodd, *Interpretation of the Fourth Gospel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1953), 309-311; Rensberger, *Johannine*, 54.

⁶ Mary H. Schertz, and Perry B. Yoder, *Seeing the Text: Exegesis for Students of Greek and Hebrew* (Nashville: Abingdon Press, 2001), 10.

⁷ Ibid., 47-50.

⁸ N. W. Lund, *Chiasmus in the New Testament* (Chapel Hill: University of North

の形をとっていることから「chiasm、集中構造、交差型並行法」等と呼ばれている。

集中構造は言葉単位でなされるミクロ集中構造と、大きく物語ユニットでなされるマクロ集中構造とがある。下のサンプルは、ミクロ集中構造の例である。言葉や概念の順序が、中心軸を起点に転換し逆の順序に配置されている。

マタイによる福音書 6 章 34 節

A. μὴ οὖν μεριμνήσῃτε εἰς τὴν αὔριον, (34 節 a)

A'. ἢ γὰρ αὔριον μεριμνήσει ἑαυτῆς (34 節 b)

訳) A. それゆえに、明日のことまで思い悩むな。

A'. 明日のことを、明日自らが悩むから。

このような転換表現により、テキストの持つメッセージが先鋭化するのである⁹。このような例は数多くあり、更に広いテキストを扱う集中構造もある¹⁰。

2) ミクロ集中構造とマクロ集中構造の基準

Carolina Press, 1942), 31. ブラウワーはこう語る「集中構造とは軸の中心概念をめぐって巡回する言葉と表現と主題のバランスをとる用法であり、はじめの半分の順序に対して後半の半分に、言葉と表現と主題の順序が入れ替わるものである。」 Wayne Brouwer, *The Literary Development of John 13-17: A Chiasmic Reading* (Atlanta, Georgia: The Society of Biblical Literature, 2000), 2-3.

⁹ 教段に渡るミクロ集中構造の例 (ヨハネによる福音書 6 章 19-21 節)。

A They saw Jesus walking on the sea and coming near the boat, (19b)

B They were terrified. (19c)

C But he said to them, "I AM. (20a)

B' Do not be afraid." (20b)

A' They wanted to take him (Jesus) into the boat, (21a)

¹⁰ Ian H. Thomson, *Chiasmus in the Pauline Letters* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1995), 27-28. 例、エフェソ人への手紙 1 章 4-10 節の集中構造。

集中構造や並行法は聖書研究に有効であるが、研究者たちによる曖昧で疑わしい「集中構造っぽい (Chiasm-like)」ものが多く提案されて課題となっている¹¹。例えば、ピーター・エリスは第四福音書全体に渡るミクロ集中構造の研究を発表しているが¹²、多くの研究者がその主張の判断基準の曖昧さを問題視している¹³。したがって説得力のある基準を立て上げることが重要なのである¹⁴。

マクロ集中構造は、一語や一文によって形成されるミクロ集中構造と異なり、物語ユニットごとに配置される。多くの学者たちは、マクロ集中構造が聖書の中で用いられているという多くの証拠を見ているが¹⁵、S・E・ポーターと J・T・

¹¹ Thomson, *Chiasmus*, 22; Cf. John Ashton, *Studying John: Approaches to the Fourth Gospel*. (Oxford: Clarendon Press, 1994), 153; George Mlakuzhyil, *The Christocentric Literary Structure of the Fourth Gospel*. (Rome: Editrice Pontificio Istituto Biblico, 1987), 238-241.

¹² Peter F. Ellis, *The Genius of John* (Collegeville, Minn.: The Liturgical Press, 1984), 13-15.

¹³ Brouwer, *Literary*, 155-156.

¹⁴ Thomson, *Chiasmus*, 22-34; Brouwer, *Literary*, 30, 38-42. Cf. Alan Culpepper, "The Pivot of John's Prologue," *NTS* 27 (1980-1981) 7-8; David J. Clark, "Criteria for Identifying Chiasm," *Linguistica Biblica* 5 (1975) 63-72.

ルンドがミクロ集中構造を確認するために以下のような要素を発表した。(1) 集中構造の中心と見られる部分は、常に転換点である。

(2) 思想は中心で展開し、前の流れに登場した議論と主題の発展として、しばしば正反対の考えへと転換する。

(3) 中心を軸とした反対側に一致するアイデアが配置される。

(4) あるアイデアが対極の場所と中心に、再び配置される。

(5) 中心に向かって、ある言葉が引き寄せられる。

(6) 文章の枠によって、より大きなユニットが頻繁に紹介され、また結論付けられる。

(7) 集中構造の発展は頻繁に直線的な発展を伴って散りばめられる。

Lund, *Chiasmus*, 40-41; cf. Brouwer, *Literary*, 30.

¹⁵ E.g., Gary M. Burge, *John The NIV Application Commentary* (Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 2000), 488; Graig S. Keener, *The Gospel of John: A Commentary/Volume One*. (Peabody, Massachusetts: Hendrickson, 2003), 895; Charles H. Talbert, *Reading John: A Literary and Theological Commentary on the Fourth Gospel and the Johannine Epistles*. (N.Y.: The Crossroad Publishing

リードは、ルンドが主張したミクロ集中構造の基準を適用することの難しさを指摘し、マクロ集中構造を見極める、より客観的な基準の必要性を主張した¹⁶。そこでクレイグ・ブロンバークによって提案されたマクロ集中構造を見極める九つの基準を紹介する¹⁷。

マクロ集中構造の基準 (C・ブロンバーク)	
基準 1 : 集中構造と思われる箇所、別の文学的発展が見られる場合はマクロ集中構造としては問題であると見なされる。 解説) 集中構造として成り立つかを確認するときに、テキストがより明確な区分で分断されているか、別の明らかな文学構造の一部となっている場合、その箇所は疑問視される。	
基準 2 : 集中構造の両側に明らかな並行法が成り立っていないか、成り立っていない。	
基準 3 : 集中構造の両側に明示された言葉や概念によって並行法が成り立っていない。	
解説) 並行する言葉や概念は対になる文章の区付けを最も顕著に特徴付けるものであるべきである。	
基準 4 : セクシヨンの間の並行法は明確で意義深さのあるものでなくてはならない。並行する言葉は中心的な用語とイメージを含まなくてはならない。主要でない言葉や些細な表現では成り立たない。	
基準 5 : 並行する言葉や概念はその集中構造の中で、どこにでも頻繁に見出しうる用語や概念であってはならない。	
基準 6 : 対になる箇所、複数の一致するセット、複数の並行する要素があることが望ましい。	
基準 7 : マクロ集中構造のフレームはテキストの自然な区分で分けられるべきである。文書全体を別の構造で理解する者たちによっても、	

Company, 1992), 237.

¹⁶ Stanley E. Porter, and Jeffrey T. Reed. "Philippians As a Macro-Chiasm and Its Exegetical Significance," *New Testament Studies* 44 (1998) 221; cf. Brouwer, *Literary*, 35.

¹⁷ Craig Blomberg. "The Structure of 2 Corinthians 1-7," *Criswell Theological Review* 4 (1989): 5-8. Brouwer, *Literary*, 40-41, 96-154.

その区分は自然であると認められるほうがよい。

基準 8 : 集中構造の中心は神学的、また倫理的な視点で、意義深く価値ある箇所であってはならない。

基準 9 : 集中構造のフレームにおいて、断絶はできるだけ避けられるべきである。これまで議論されてきたことによると、並行する片方の順番が対になる部分で構造上、反転している箇所がある場合、実質その仮説を弱めることとなる。

本論文では暫定的な基準として用いる。文学的性質と構造枠 (基準 1, 7, 9)、並行する形状の評価 (基準 2-6)、中心軸の意義 (基準 8) というように順序を再構成して用いることにする。

III 第一過越物語の集中構造

1) 第一過越物語の枠

ここでは第四福音書の第一過越物語 (1:19-4:54) の構造を研究していく。直接、過越の祭りを背景としていないテキストも含まれているが、過越祭への巡礼をめぐるサイクルとして理解できる (2:13, 23, 4:3-4, 45)。二つのカナを舞台とする物語 (2:1-12, 4:46-54) が、第一過越物語における囲い込みとして機能している¹⁸。

第一カナ物語 (2:1-12)

第二カナ物語 (4:46-54)

[―――第一過越物語―――]

フランシス・モローニーは2章から4章の文章ユニットを「カナからカナへ」と呼び、二つのカナ物語を囲い込みとして理解した¹⁹。この研究では第一過越

¹⁸ Mlakuzhyil, *Christcentric*, 171. Burge, *John*, 151.

¹⁹ Francis J. Moloney, "From Cana to Cana (John 2:1-4:45) and the Fourth Evangelist's Concept of Correct (and Incorrect) Faith," *Studia Biblica 1978: II Paper the Gospels: Sixth International Congress on Biblical Studies* (Sheffield, England: Sheffield, 1980), 185-213; Moloney, *John*, 63-64. Cf. Mlakuzhyil, *Christcentric*, 239; Brown, *Gospel*, 195; Burge, *John*, 64.

物語が下記のマクロ集中構造を持っていることを主張したいと思う。

第一の過越物語の集中構造フレーム

- A. 第一のカナ物語 はじめのしるし (2:1-12)
- B. ガリラヤからエルサレムへ過越祭のために行く (2:13)
- C. エルサレム神殿 (2:14-22) ニコデモとの対話 (3:1-15)
- D. ナレシオン (3:16-21)
- E. 洗礼者ヨハネ (3:22-30)
- D'. ナレシオン (3:31-36)
- C'. ゲリジム山 サマリヤの女との対話 (4:1-42)
- B'. ガリラヤへと過越祭から帰る (4:43-45)
- A'. 第二のカナ物語 第二のしるし (4:46-54)

2) 第一過越物語マクロ集中構造的吟味

(A) フレームの検証 (基準 1、7、9)

このセクションでは、集中構造的三つの側面が吟味される。第一の側面として、第一過越物語は全体として一つの貫いた思考ユニットであるかどうかである。もし、それ以外の説得性のある文章構造的断絶がある場合、このマクロ集中構造的疑問視されなくてはならない (基準 1)。第二は、文章ユニットの切れ目が自然なところで起こっているか吟味する (基準 7)。三つ目に、並行するアウトラインに、突然の飛び、ギャップ、順序の変化がないことが確認され、集中構造的直ぐに構成されているかを吟味する (基準 9) ²⁰。

文章ユニット全体の首尾一貫性については、ほとんどの研究者が、第一過越物語が一つのまとまりをもった文章であることに同意している。考慮すべき点として、カナの結婚式が、それ以前の弟子たちの召命物語と七日間の枠組において結びついていることがある (1:19-2:12) ²¹。モローニーは「カナからカナへ」という題名の論文で、この日にち設定を考察している ²²。一方でモローニー

²⁰ Blomberg, "Structure" 5-7; Brouwer, *Literary*, 4-41.

²¹ 第一のカナ物語は七日間の枠組の閉めの部分であり、その前の箇所と結びついている。弟子集めに四日間が用いられ (1:29, 35, 43)、第一のカナ物語は「三日目」に起こっている。この七日間の枠組は、テキストが明示する構造枠である。

²² Moloney, "Cana," 185-213.

一はこの七日間の枠組を受け入れつつ、他方ではそれらの聖書箇所間にある主題的变化を指摘する。第一カナ物語の前の洗礼者ヨハネの記事 (1:19-51) は、キリスト論において「啓示者の約束」というテーマであるが、「メシア的働き」は第一カナ物語からはじまるテーマである ²³。このように、モローニーは第一カナ物語から第二カナ物語へと続く聖書箇所との結びつきを強調している。

切れ目の自然さを問う基準 7 に対しては、それを満たしていることを明言することができ。第一過越物語の集中構造的は、九つの区切り目を持つ。七つは旅の関連で時間的・地理的な区切り目である。カナへ (2:1)、カナからカナペナムへ (2:12)、エルサレムへ (2:13)、ユダヤへ (3:22)、サマリヤを通過して (4:1-4)、ガリラヤへ (4:43)、カナへ (4:46)。残りの二つ (3:16, 3:31) は、物語文からナレシオンに入る場所で起こる。3 章 16 節にある切れ目は主語の転換によって認識される。イエスが用いた一人称主語が三人称「御子 (3:16)、彼 (3:17)、ひとり子 (3:18)」へと変わっている。それゆえに、イエスの言葉は 3 章 15 節で終わり、ナレーターの言葉が 3 章 16 節から 21 節まで続いている ²⁴。

²³ モローニーは「1 章 19-51 節の聖書箇所において待望され約束されたことから、2 章 1-11 節において事実成されたことへの明らかな質的飛躍がある」と主張する。

Moloney, "Cana," 188.

²⁴ Burge, *John*, 117-118.

(B) 並行する内容の検証 (基準 2-6)

A. 第一のカナ物語、はじめのしるし (2:1-12)	(1) 地理: カナ、(2) 「最初のしるし」、(3) 物語サイクル
B. ガリラヤからエルサレムへ過越祭のために行く (2:13)	(1) 第一過越物語の巡礼
(2) 地理: カナ - ガリラヤ - エルサレム	
C. エルサレム神殿 (2:14-22)、ニコデモとの対話 (3:1-15)	(1) ユダヤ人のためのエルサレムでの礼拝
(2) 地理的要素を超越した礼拝: 新しい神殿としてのイエスの復活の体	(3) 「多くのユダヤ人が信じた」
(4) 人物設定: ニコデモは夜にイエスを訪ねるユダヤ人男性のラビ	(5) 人物設定: ニコデモは個人的、また共同体的存在
(6) 二重の意味を持つ対話	(7) 象徴: 水と霊
D. ナレシオン (3:16-21)	(1) 語り手: ナレーター
(2) ケリュグマ的なメッセージ	(3) 七つの並行する神学的主張 例) 地上的/天的、永遠の命
E. 洗礼者ヨハネ (ユダヤ地方)、結婚モテーフ (3:22-30)	D'. ナレシオン (3:31-36)
(1) 語り手: ナレーター	(2) ケリュグマ的なメッセージ
(3) 七つの並行する神学的主張 例) 地上的/天的、永遠の命	C'. ゲリジム山、サマリヤの女との対話 (4:1-42)
(1) サマリヤ人のためのゲリジム山での礼拝	(2) 地理的要素を超越した礼拝: 霊的な礼拝
(3) 「多くのサマリヤ人が信じた」	(4) 人物設定: 屋にイエスと出会ったサマリヤの女性
(5) 人物設定: サマリヤの女性性は個人的、また共同体的存在	(6) 二重の意味を持つ対話
(7) 象徴: 水と霊	B'. ガリラヤへ過越祭から戻る (4:43-45)
(1) 第一過越物語の巡礼	(2) 地理: エルサレム (サマリヤを通じて) - ガリラヤ - カナ
A'. 第二のカナ物語、第二のしるし (4:46-54)	(1) 地理: カナ、(2) 「第二のしるし」、(3) 物語サイクル

a. 二つのカナ物語

2 章 1-12 節と 4 章 46-54 節の物語は深い結びつきをもって描かれている。まず舞台の町がカナであり、次に明示的に「最初のしるし」、「第二のしるし」とナレーターが語る。そして、下の表のように、共通する物語サイクルを持っている。

二つのカナ物語のサイクル (A・カルペツパー) ²⁵
1. 嘆願者がイエスに依頼する 2:3、4:47
2. イエスは依頼をはねつける 2:4、4:48
3. 嘆願を続ける 2:5、4:49
4. イエスはかなえるための指示を与える 2:7、4:50
5. イエスに従い、しるしは成し遂げられる 2:8-9、4:50
6. 第三者によってしるしが実証される 2:10、4:51
7. 信仰の応答がある 2:11、4:53

b. 巡礼の旅

2 章 12 節から 13 節と 4 章 43 節から 45 節の二つの文章ユニットは第一過越物語の舞台設定としてエルサレムでの祝祭のための巡礼を明示している (2:13、4:45)。しかしながら、このテクニストを巡礼という循環的な旅ではなく、直線的な旅として解釈する研究者が少なくない。例をあげると、カルペツパーはこの旅の一部をルカ文書の直線的な旅モチーフと重ねて理解しようとする²⁶。カ

²⁵ Alan R. Culpepper, *The Gospel and Letters of John*. (Nashville: Abingdon Press, 1998), 130-131, 145-146. カルペツパーは、この物語サイクルを 11 章のラザロの復活物語にも適用しようとしているが、強いて読み込んでいるようで、11 章にはあてはめるには不自然である。この物語サイクルは、第四福音書では、二つのカナ物語の独自のものと言える。Cf., Brown, *John*, 194; Moloney, "Cana," 190-191.

²⁶ Culpepper, *Gospel*, 129. カルペツパーはヨハネ福音書 2 章から 4 章の地理的流れをエルサレム (2:13-3:21)、ユダヤ (3:22-30)、サマリヤ (4:1-42)、ガリラヤ、役人 (4:46-54; cf. 12:20-21) とし、使徒言行録の世界宣教の旅「エルサレム、ユダヤ、サマリヤ、地の果て」(使徒言行録 1:8) と重ね合わせる。

ルベツパーは「これらの章の地理的設定は、使徒言行録の最初の部分における教会の広がり興味深い方法で対応している。パターンは一致しているようにある」²⁷と語る。しかしながら、この視点は少なくとも二つの地理的特徴を見落としている。第一に巡礼という往復のサイクルを持つこと、第二に使徒言行録の地理的動きと合わない地理（カナ等）を、恐らく意図的に無視していることである。ヨハネ福音書2章12節から13節は「カナ・ガリラヤ・エルサレム」という順序で舞台が動き、4章43節から45節ではそれを遡る動きをしている。ルカ文書の教会の広がりという地理的動きとは、異質のヨハネ福音書の特徴的な巡礼サイクルを見落としてはならない²⁸。

c. ニコデモとの対話とサマリヤの女との対話

ニコデモとの対話とサマリヤの女との対話(2:14-3:15, 4:1-42)が共有する七つの事柄がある。一つ目は、人物設定である。ジョン・アシュートンは人物描写において、対話物語は対をなしていることを指摘する。ニコデモとサマリヤの女は、ユダヤ人/サマリヤ人、男/女、夜/昼、内密/公け、屋内/屋外という対比関係にあり、バージもニコデモとサマリヤの女を、人物設定における「双子」と呼んでいる²⁹。二つ目も人物設定の性質であり、対話の中で「私」(単数)と「私たち」(複数)が二回入れ替わることである³⁰。この描写は、ニコデモ

²⁷ Ibid., 129.

²⁸ Alan R. Culpepper, "The Plot of John's Story of Jesus," *Gospel Interpretation: Narrative-Critical & Social-Scientific Approaches*, ed. Jack Dean Kingsbury. (Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers, 2003), 193. Cf. E. C. Webster, "Pattern in the Fourth Gospel," *Art and Meaning: Rhetoric in Biblical Literature*, ed. D. J. A. Clines, et al. JSOTS Supplement Series 19. (Sheffield, England: Sheffield, 1982), 236.

²⁹ John Ashton, "John and the Johannine Literature," *The Cambridge Companion to Biblical Interpretation*, ed. John Barton. (UK: Cambridge University Press, 1998), 262; Raymond F. Collins, "From John to the Beloved Disciple: An Essay on Johannine Characters," *Gospel Interpretation: Narrative-Critical & Social-Scientific Approaches* (Eugene, Oregon: Wipf and Stock Publishers, 2003), 203-205. Cf., Burge, *John*, 111.

³⁰ 両方の物語は複数で始まり(3:2: 4:9)、対話の主要な部分は単数の人称代名詞が用いられ(3:3-10, 4:10-19)、そして「私たち」「あなたがた」という複数の代名

とサマリヤの女は両方とも、第四福音書において個人的な性質と共同体の代表的性質とを合わせ持った存在として登場していることを表している。

第三に、対話で用いられる主要なメタファーが「水と霊」であること、第四に、その象徴表現が二重の意味を持っていることである。五つ目に、礼拝の場であるエルサレム神殿とゲリジム山にある神殿とをめぐめる対話がなされる。第六番目に、両方のテキストで、神殿の場所の地理的要素を超越した真の礼拝が語られる。第七番目は宣教の結果として「多くの人々が信じた」(2:23, 4:41)というほぼ一致した表現が登場することである。

d. 二つのナレーション

3章13節から21節の語り手がナレーターであることは、主語が一人称から三人称に転換することから分かる³¹。3章31節から36節の語り手は不明確である。ある研究者は36節まで洗礼者ヨハネの言葉が続いていると考える³²。しかしながら3章13節から21節のナレーションと内容が呼応していることから、近年の学者たちは福音書記者のコメントと見る傾向が強い³³。カルベツパーは3章31節から36節について、イエスが語られていると理解するか、もしくは殆どイエスの言葉と区別できない声によってナレーターが語っていると推測できるとしている³⁴。

これら二つのナレーションは、第一過越物語における他のナレーションとは別の特質をもっている。他のナレーションは物語の流れをなめらかにする役割をもっている(2:1-2, 11-15, 21-3:1, 22-25)。他方、シュナッケンブルグはこれ

詞が物語の後半に用いられている(3:11, 12, 4:20)。

³¹ E. g., Burge, *John*, 113; Culpepper, *Gospel*, 136, 138; Wes Howard-Brook, *Becoming Children of God: John's Gospel and Radical Discipleship*. (Maryknoll, N.Y.: Orbis Books, 1994), 89-90.

³² Herman Ridderbos, *The Gospel of John: A Theological Commentary*. (Grand Rapids, Michigan: William B Eerdmans Publishing Company, 1991), 148. Cf. C. K. Barrett, *John*, 224.

³³ Ridderbos, *Gospel*, 149; Burge, *John*, 122; Culpepper, *Gospel*, 138; Howard-Brook, *Becoming*, 98; Keener, *John*, 581.

³⁴ Culpepper, *Gospel*, 138. バージはこのユニットは伝道者によって記述された「黙想か神学的エピソード」という理解を提案している Burge, *John*, 122.

ら二つのナレーションはケリュグマ的な性質をもっている³⁵。カルペッパーは、二つのナレーションが内容において「一対」であり、四つの神学的主張の一致を持っていることを指摘している。

- (1) 地上的と天的の対比(12節、31節)
- (2) 見て聞いたことを証しすること(11節、32節)
- (3) 神が遣わされた者についての言及(16節、34節)
- (4) 永遠の命と裁きについての議論(19-21節、36節)³⁶

リダーボスはさらに二つを提案し、「証しを受け入れる(ない)」(11節、32-33節)と「御子を信じる」(15-16節、36節)を共通する神学的主張のリストに加えている³⁷。さらに「御子を与える父の愛」(16節、35節)も加えることができらる。第一過越物語に「愛 (*ἀγάπη*)」は、これらのナレーションの中だけに登場するので、一層意義深さを持っていると言える。このように、二つのナレーションが並行すると見るのに充分な七つの一致する神学的な主張があることが分かる。

IV 中心の神学的倫理的意義：敵意を越える信仰共同体

ブロンバークの基準8に「集中構造の中心は神学的、また倫理的な視点で、意義深く価値ある箇所ではなくてはならない」とあるので、第一過越物語のマクロ集中構造の中心点の意義深さを考察する。

集中構造の視点から2-3章のユダヤ人との対話の記事と、4章のサマリヤを舞台とする物語とは並行関係にあることを見てきた。これらの平行するテクニクの両側に、民族的敵意をキリストの福音によって乗り越えさせるヨハネ共同体のメッセージが描かれている。サマリヤ民族とユダヤ民族の間には敵意に満ちた歴史的背景がある。その敵意の狭間にヨハネ共同体は存在していた。新約学者の W・スワートリーは、このテクニクの背景となる紛争の歴史を要約して

³⁵ Rensberger, *Johanne*, 53. Cf. Rudolf Schnackenberg, *Gospel According to St. John*, 3 vols. (New York: Crossroad Publishing Co., 1982), 1:361-362.

³⁶ Culpepper, *Gospel*, 137-138.

³⁷ Ridderbos, *Gospel*, 148.

いる。紀元前 180 年にアレキサンダー大王がサマリヤ人に神殿を建てる許可を出して以来、サマリヤ人はゲリジム山の神殿で礼拝を捧げていた。マカベアの乱(紀元前 128 年)の後、ヨハネ・ヒルカノスはゲリジム山を燃やし、彼はシケムを滅ぼした(紀元前 107 年)。その後、あるサマリヤ人たちが種無しパンの祭りで、神殿を汚す目的で人間の骨をエルサレム神殿に撒き散らした(紀元前 6-9 年)³⁸。ユダヤ人とサマリヤ人の間に敵意があったことは、福音書の中にも繰り返して出てくる。民族間の軋轢が現れる場としてエルサレムの神殿とゲリジム山の神殿があるという歴史的な背景を受け止めて第四福音書 2 章から 4 章を読むときに、ヨハネ共同体が二つの敵対する民族が共生する特別な場となっていることの意義深さが分かる³⁹。

集中構造の視点から明らかになることは、敵対する二つの民族が、イエス・キリストによって、共に真の礼拝へと招かれていることである。2 章ではユダヤ人に対して、エルサレム神殿という場所での礼拝形式が、キリストによって成就することがメッセージとして伝えられている(2:19-21)。サマリヤの女性との対話でも、礼拝の地理的・民族的な形式から解き放たれるように導かれているのである。主イエスは「あなたがたが、この山〔ゲリジム山〕でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」(4:21)と語る。

この礼拝についての対話の直前に、主イエスはサマリヤの女性の結婚生活に

³⁸ Josephus, *Jewish Antiquities*, 18. 2. 2 § 29-30. Willard M. Swartley, "Peace and Mission in John's Gospel: Jesus and the Samaritan Woman (John 4),"

Beautiful upon the Mountains: Biblical Essays on Mission, Peace, and the Reign of God, ed. Mary H. Schertz and Ivan Friesen. (Elkhart, IN: Institute of Mennonite Studies, 2003), 166-167. ウィラード・M・スワートリー、「ヨハネ福音書における平和と宣教——ヨハネ 4 章のイエスとサマリヤの女」『神学思潮』20 号、石田学記、2005 年。

³⁹ ヨハネ福音書の執筆場所の議論が、以前は小アジアとする理解が主流であったが、パレスチナとする解釈が研究者たちの関心を引いていることに触れておく。K・ゲンクストは、パレスチナとシリアの境界地域、現在のゴラン高原と主張する。K. Wengst, *Bedrängte Gemeinde und verherrlichter Christus*, 3. Aufl., (München, 1990); 大貫隆「ヨハネによる福音書」『新版総説新約聖書』、2003 年、137-138 頁; Rensberger, 33. 共同体の場所をパレスチナとする仮説を指示する、一つの論拠はヨハネ共同体のサマリヤ人キリスト者の存在であると言える。

触れる。それに関して三つの解釈があるだろう。一つは、サマリヤの女性は結婚生活が乱れ結婚と離婚を五回繰り返し、現在は同棲しているという解釈である。しかし、道徳水準が高く、姦通罪は石打とされるこの文化で、婚姻関係を女性個人の意思で五回結ぶことは極めて困難なことと思われる。むしろ、レヴィ・シュナイダーがこの視点でサマリヤの女を解釈している⁴⁰。跡取りが与えられずに夫が死去した場合、夫の弟によって長男の子を宿す社会慣習である。サドカイ人がイエスに、レヴィ・レート婚で七人と結婚した場合、天において誰の妻となるのかと問うた記事があるが（マタイ福音書 22:33、マルコ福音書 12:18-27）、この制度の中で、サマリヤの女性は忠実に家族を守ろうとした女性であったのではないだろうか。三つ目の解釈は、「五人の夫」は、列王記下 17 章 24-41 節にある五つの偶像信仰を受け入れたサマリヤの姿を象徴的に意味しているとする理解である⁴¹。レヴィ・レート婚についてはサマリヤの女個人において、偶像礼拝については民族において妥当な理解と言える。この偶像礼拝が、ユダヤ人との軋轢の原因の一つであった。そして、この民族的な偶像礼拝を結婚モティーフと合わせて描写することによって、第四福音書は、その問題の核心に迫り、新しい生き方へと招いている。

ここで思い起こしたいことは、1 章から 4 章までの第一過越物語全体に、結婚モティーフが主要な役割を担っていることである。ユダヤ人を舞台としたカナの結婚式と、サマリヤの女と民族の礼拝に見る結婚生活の辛苦を解消するためにキリストが到来したことである。そして、マクロ集中構造の頂点にある聖書箇所、洗礼者ヨハネが語る「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている」（3:29）。

ヨハネ共同体において、花嫁である信仰者の群れはユダヤ人とサマリヤ人の両方を含み、その花嫁なる教会と花婿なるキリストとの関係を喜ぶこの言葉は

⁴⁰ Sandra M. Schneiders, "A Case Study: A Feminist Interpretation of John 4:1-42 (1991)," *The Interpretation of John* (Edinburgh: T&T Clark, 1986), 245-260. Swartley, "Peace and Mission," 168.

⁴¹ Swartley, "Peace and Mission," 168.

意義深い。キリストのリアリティーが、礼拝の場において紛争があった二つの民を共に礼拝を捧げることができるよう導くのである。

結び

この論文で行なった研究は、これまでのヨハネ福音書研究に、いくつかの光をあてることになると考えられる。第一は、マクロ集中構造を分析するにあたって、いくつかの先行研究と対話し、ある程度の説得力を持つ基準を提供できたこと。そして、ヨハネ福音書 2-4 章のマクロ集中構造はブロンバークの基準を満たしていることである⁴²。

第二のことは、本論文第一章「歴史的批評学によるヨハネ福音書 3 章の諸解釈」で概観したことに対して、より説得力のある構造理解を提供したことである。ヨハネ福音書 3 章 13-21 節と 3 章 31-36 節とに分かれて配置されている神学的ナレーションは、編集の過程で起こった不自然な分裂や誤った配置なのではなく、美しい集中構造を組み立てるために福音書記者が意図的に用いた筆使いのあらわれとして受け止めるべきであることが分かる。

第三に、集中構造の中心で洗礼者ヨハネが指し示す花婿なるキリストの福音が、ユダヤ人とサマリヤ人の民族的敵意を乗り越えさせて、ヨハネ信仰共同体の一部として生きるように招く平和形成的な神学的・倫理的メッセージを持っていることである。

(日本ホーリーネス教団・鳩山のぞみ教会牧師)

⁴² Blomberg, 7; Brouwer, 154.